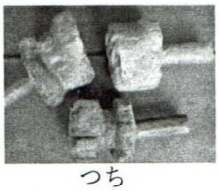
ようこそ
樫の木文化資料館へ

―自然と人間の共生を願って―

「樫の木文化資料館」

佐藤一英は、北緯３５度線上に照葉樹林が繁茂し、カシの木を農具とし、大地を掘り起こし農耕生活を行い、豊かな文化を築いたことに着目し、**「カシの木は日本人の生活や文化に大きな影響を与え、カシの木は一切の根元である」**と**「樫の木文化論」**を提唱。**昭和４４年６月に**、農具をはじめとした生産道具３００点を収納した**「樫の木文化資料館」**が萬葉公園高松分園に建設された。

監修 佐藤 史門　制作 田内 雅弘　発行所 土筆庵 ©

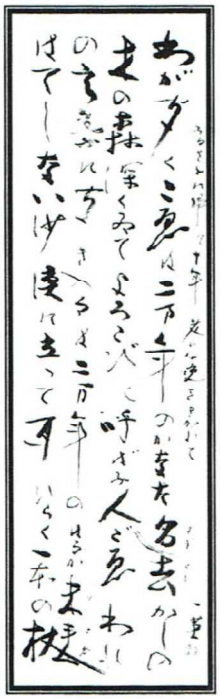


つち

わたくり

備中・くわ

カシの木の材質は、堅固で、しなやかで生産道具に適し、実のドングリは、粉にして食料に使用された。



「二万年前、カシの木の森が繁茂し。農耕文化を築いた人々の喜びの声に満ち溢れていたが、二万年後の未来は、果てしない沙漠に・・・」一英は、樫の木を通じて自然と人間の共生を訴え、現代文明の危機を警告した。

「樫の木文化資料館」の生みの親

庭に植樹する一英夫妻

一英は、カシの木の根っこを杖にして愛用していた。

一英は、１８９９年１０月、萩原町高松に生まれ、大正、昭和時代、日本語の美しい響きを表現した韻律詩人として詩壇に名を残す。戦後、故郷に留まり、「萬葉公園」の設立・校歌の作詞など地域文化の向上に尽力した功績により、「市政文化功労章」を授与される。

１９７９年８月永眠。行年７９歳。

著作に「晴天」「大和し美し」など多数あり、「佐藤一英詩集」・「随筆集」（講談社）を刊行。

ふるさとに帰って十年、老いの心境をきかれて
「わが聞く声は2万年の　かなた過ぎこし　かしの木の　森深くいて　喜びに　呼ばう人声
われの言葉に聞き入るは　2万年のはるかゆくすえ　　はてしない　砂漠に立って
耳開く　1本の杖」　（佐藤一英生誕120年記念、樫の木文化資料館50周年記念
『21世紀は、「カシ（樫）の木」が人類を救う　＝詩人佐藤一英の「樫の木文化論」＝』
著者、田内雅弘 p47より）田内さんは、同書で「21世紀は「自然と人間との共存することの大切さ」を訴えた一英さんの思想が開花する時代です。」と解説しています。